

京都大学人文科学研究所蔵『天地瑞祥志』第十七翻刻・校注（下）

佐野 誠子
松浦 史子

はしがき

『天地瑞祥志』は、唐代、薩守真による天文を中心とした専門類書であり、日本にのみ残された佚存書である。2011年秋より、数名の有志により天地瑞祥志研究会（代表・水口幹記）を立ち上げ、輪讀會を行ってきた。これまで、水口幹記、田中良明による第一の翻刻・校注を『藤女子大学國文學雑誌』93号、94号（2015年11月、2016年3月）に掲載したのを皮切りに、幾つかの雑誌において翻刻・校注を掲載してきた。本『名古屋大学中国語学文学論集』では、第29輯（2015年12月）に佐野誠子、佐々木聡による第十四の翻刻・校注を、第31輯（2018年2月）に山崎藍、佐野誠子、佐々木聡による第十七前半（甕まで）の翻刻・校注を掲載した。ここに第十七後半の翻刻・校注を掲載する。『天地瑞祥志』についての詳細な解説は、『藤女子大学國文學雑誌』93号掲載の水口幹記による序を参照されたい。

この第十七前半の翻刻・校注は佐野誠子（印璽～船）、松浦史子（金車～威香）の二名が擔當したが、この成果は決して二名だけの手になるものではなく、研究会の参加者による意見の集約であることを附言しておく。

最後に、本書の画像の掲載を許可して下さった京都大学人文科学研究所に記して謝意を示したい。

凡例は第29輯に掲載の第十四翻刻・校注を参照されたい。本稿では、わかりやすさのため、各項目の通し番號の前に項目名をつけた。また、前田尊經閣文庫本による校注もそれぞれの執筆者が行った。

翻刻・校注

一五、 印璽

【概要】

印璽の出現に関する瑞祥記事を集める。

印璽 01 ①

印璽〈因胤反去思紫反上〉

印璽 01 ②

印璽〈因胤反。去。思紫反。上。〉

印璽 01 ③

印璽^(一)〈因胤の反。去。思紫^(二)の反。上。〉

印璽 01 ④

(一)『玉篇』卷二八「印」字「伊刃切」、『廣韻』卷四「印」字「於刃切」。「因胤反」の反切注例はなし。

(二)『玉篇』卷一「璽」字「思此切」、『大益廣會玉篇』卷一「璽」字「思比切」、『廣韻』卷三「璽」字「斯氏切」。

印璽 02 ①

説文印符也璽印也皆節信也

印璽 02 ②

『説文』、「印、符也。」「璽、印也。」皆節信也。

印璽 02 ③

『説文』に、「^(一)印は、符なり。」と。「^(二)璽は、印なり。」と。皆節信なり。

印璽 02 ④

(一)「印」字は、『説文解字』九篇上印部にみえるが、『説文解字』に「印、符也」の文言なし。『資治通鑑』卷三七、漢紀王莽始建國元年秋「北出至匈奴庭、授單于印、改漢印文、去璽言」の元・胡三省の注に「印、符也、信也。亦因也。封物相因符」とある。また『廣韻』卷四では、「印、符印也、印信也」とある。

(二)『説文解字』十三篇下土部にみえる。『周禮』秋官司元寇・鄭玄注及び蔡邕『獨斷』卷上にも「璽者、印也」の記述あり。

印璽 03 ①

瑞應圖曰王者明德感天地則璽印之符得郊野也

印璽 03 ②

『瑞應圖』曰、「王者明德感天地、則璽印之符、得郊野也。」

印璽 03 ③

『瑞應圖』に曰く、「^(一)王者徳を明らかにして天地に感ずれば、則ち璽印の符、郊野に得たるなり。」と。

印璽 03 ④

(一)『瑞應圖』ここのみに残る佚文。

印璽 04 ①

吳志曰孫皓時吳郡言臨平湖邊得石函中有小石青白色長四寸廣二寸餘刺上作黃帝字於是改年為天璽元年

印璽 04 ②

『吳志』曰、「孫皓時、吳郡言、『臨平湖邊得石函。中有小石、青白色、長四寸、廣二寸餘、刻上作黃帝字。』於是改年為天璽元年。」

印璽 04 ③

『吳志』に曰く、「^(一)孫皓の時、吳郡^{まう}言す、『臨平湖邊にて石函を得たり。中に小石有り、青白色、長さ四寸、廣さ二寸餘り、上に刻して黃帝の字を作す。』と。是に於て年を改めて天璽元年と爲す。」と。

印璽 04 ④

(一)『三國志』卷四八、吳志・孫皓傳天璽元年條にみえる。このほか『太平御覽』卷九八、皇王部二三・東晉元皇帝には孫盛『晉陽秋』からとして、同内容の引用がある。天璽の出現は、天發神讖碑（現在は拓本のみが残る）にその事跡が刻まれた。

印璽 05 ①

魏志曰咸熙元年鎮西將軍衛瓘成都縣得壁仲各一印文似成字依周成王歸亦之義宣示百官藏千相國府也

印璽 05 ②

『魏志』曰、「咸熙元年、鎮西將軍衛瓘、成都縣得壁・[□]印各一。印文似成〔[□]信〕字、依周成王歸[□]禾之義。宣示百官、藏[□]于相國府也。」

印璽 05 ③

『魏志』に曰く、「^(一)咸熙元年、鎮西將軍衛瓘、成都縣にて壁・印各の一を得たり。印文成信の字に似たり。周の成王の歸禾の義に依る。百官に宣示し、相國府に藏するなり。」と。

印璽 05 ④

(一)『三國志』卷四、魏志・三少帝紀・陳留王奂傳にみえる。『太平御覽』卷六八三、儀式部四・印にも同内容が『魏志』からとして引用がある。

一六、 金勝

【概要】

底本は「金勝」に作る。「金勝」は金属製のひも。ただし、引用元を参照するかぎり「金勝」を誤写して「金勝」としているようであるため、すべて「勝」字を「勝」字に改めた。この訂正については、訂正記號を省いた。

金勝 01 ①

金勝 〈錦林反平鄧祭反平〉

金勝 01 ②

金勝 〈錦林反。平。鄧祭反。平。〉

金勝 01 ③

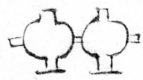
金勝^(一) 〈錦林の反。平。^(二) 鄧祭の反。平。〉

金勝 01 ④

(一) 『玉篇』 卷一八「金」字「居音切」、『廣韻』 卷二「金」字「居吟切」。「錦林反」は反切注例はなし。

(二) 『玉篇』 卷二七「勝」字「達曾切」、『廣韻』 卷二「勝」字「徒登切」。また、『玉篇』 卷七「舒陵切」、『廣韻』 卷四「勝」字「詩證切」なため、「鄧祭反」の反切注は不審。

金勝 02 ①



此二中者銅黃也

金勝 02 ②

此二中者、銅黃也。

金勝 02 ③

^(一) 此の二の中は、銅黃なり。

金勝 02 ④

(一) 未詳。

金勝 03 ①

孝經援神契曰金勝象人所引華勝而金色四夷賓服則出

金勝 03 ②

『孝經援神契』曰、「金勝、象人所引華勝而金色。四夷賓服、則出。」

金勝 03 ③

『孝經援神契』に曰く、^(一)「金勝は、人の引く所の華勝^にに象て金色なり。四夷賓服すれば、則ち出づ。」と。

金勝 03 ④

(一) 『唐開元占經』 卷一一四、金勝に『孝經援神契』からとして引用がある。

金勝 04 ①

晋中興書徵祥説曰四蠻賓服 則金勝見金勝者仁寶也永和元年陽爰民得金勝一枚長五寸状如織勝後桓温平蜀四蠻賓服之應

金勝 04 ②

『晉中興書』徵祥説曰、「[□]四蠻賓服、服則金勝見。金勝者、仁寶也。永和元年、陽穀民得金勝一枚、長五寸、狀如織勝。後桓温平蜀。四蠻賓服之應。」

金勝 04 ③

『晉中興書』徵祥説に曰く、「^(一)四蠻賓服し、服すれば則ち金勝^{あらは}見る。金勝は、仁寶なり。永和元年、陽穀の民金勝一枚を得、長さ五寸、狀は織勝の如し。後桓温蜀を平らぐ。四蠻賓服の應なり。」と。

金勝 04 ④

(一)『北堂書鈔』卷一三五「形如織勝」の注に『晉中興書』からとして引用がある。また、『唐開元占經』卷一一四、金勝に『晉中興徵祥説』からとして引用がある。『太平御覽』卷七一九、服用部二十一・花勝に『晉中興書』からとして引用がある。

金勝 05 ①

瑞應圖曰金勝者國無盜賊人則出之

金勝 05 ②

『瑞應圖』曰、「金勝者、國無盜賊〔[□]凶〕人、則出之。」

金勝 05 ③

『瑞應圖』に曰く、「^(一)金勝は、國に盜賊凶人無ければ、則ち之を出だす。」と。

05 ④

(一)『唐開元占經』卷一一四、金勝に『瑞應圖』からとして引用がある。

一七、 環

【概要】

西王母が舜に白環を持ってきた記事を掲載する。

環 01 ①

環〈胡班反平〉

環 01 ②

環〈胡班反。平。〉

環 01 ③

環^(一)〈胡班の反。平。〉

環 01 ④

(一)『玉篇』卷一「環」字「下關切」、『廣韻』卷一「環」字「戸關切」。「胡班反」の反切注例はなし。

環 02 ①

瑞應圖曰舜時西王母使^レ者乘白馬來獻白環也

環 02 ②

『瑞應圖』曰、「舜時、西王母使使者、乘白馬、來獻白環也。」

環 02 ③

『瑞應圖』に曰く、「^(一)舜の時、西王母を使者を使はし、白馬に乗り、來たりて白環を獻ぜしむるなり。」と。

環 02 ④

(一)『初學記』卷二九、獸部・鹿、『唐開元占經』卷一一三、西王母、『太平御覽』卷六九二、服章部九・環、『太平御覽』卷八七二、休徵部一・神、に『瑞應圖』からとしての引用がある。そのほか、『宋書』卷二九、符瑞志、『金樓子』卷一には出處を示さない同内容の文が、『太平御覽』卷六二六、治道部七・貢賦、『初學記』卷二〇、政理部・貢獻は『帝王世紀』からとして、『太平廣記』卷二〇三、樂一「舜白玉琯」は『風俗通』からとして同内容の文を含む。ただし、「乘白馬」とあるのはこの『天地瑞祥志』だけのようである。

一八、 玉

【概要】

玉に關する瑞祥の記事を集める。金勝に引き續き、『唐開元占經』に引用される記事を多く用いる。また、はじめの部分では形による玉の種類の圖示がある。

玉 01 ①

玉〈魚錄反入〉

玉 01 ②

玉〈魚錄反。入。〉

玉 01 ③

玉^(一)〈魚錄の反。入。〉

玉 01 ④

(一)『玉篇』卷一「玉」字「魚錄切」、『廣韻』卷五「玉」字「魚欲切」。

玉 02 ①

周官曰以玉作六器以禮

玉 02 ②

『周官』曰、「以玉作六器、以禮。」

玉 02 ③

『周官』に曰く、^(一)「玉を以て六器を作り、以て禮す。」と。

玉 02 ④

(一)『周禮』春官宗伯にみえる。玉 05 も参照のこと。

玉 03 ①



明珠〈今京反主俱反〉平

玉 03 ②

明珠〈今京反。主俱反。〉平

玉 03 ③

^(一)明珠〈今京の反。主俱の反。〉平

玉 03 ④

(一)珠がつらなるさまを表現した圖と思われる。『玉篇』卷二〇「明」字「靡兵切」『廣韻』卷一「明」字「武兵切」。『玉篇』卷一「珠」字「之兪切」。『廣韻』卷一「珠」字「章俱切」。反切の出處不明。「平」字は注文が本文に入り込んだか。

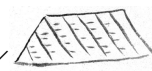
玉 04 ①



玄珪〈古攜反平〉／



璧〈并亦反入〉／



玉英平／



上同／



璋〈之^[一]良反平〉

[一]「之」、尊經閣本は「乏」に作る。

玉 04 ②

玄珪〈古攜反。平。〉／璧〈并亦反。入。〉／玉英。平。／上同。／璋〈之良反。平。〉

玉 04 ③

玄珪^(一)〈古攜の反。平。〉／璧^(二)〈并亦の反。入。〉／玉英^(三)。平。／上に同じ。／璋^(四)〈之良の反。平。〉

玉 04 ④

(一)『玉篇』卷一「珪」字、『廣韻』卷一「珪」字とも「古攜切」。

(二)『玉篇』卷一「璧」字「俾亦切」、『廣韻』卷五「璧」字「必益切」。「并亦反」は、『太平御覽』卷九四三、鱗介部・蚘蛄(項目見出し)にく上、古候切。下、并亦切。とある。

(三)玉英の下「平」字は注文が本文にまじったものと考えられる。

(四)『玉篇』卷一「璋」字「之陽切」、『廣韻』卷二「璋」字「諸良切」。「之良反」の反切注例はなし。

玉 05 ①

周官曰以作玉六以礼^{〔一〕}天地四方也〈蒼璧^{〔二〕}禮天黃琮礼地青珪礼東赤璋礼南白琥礼西玄璜礼北方也〉

〔一〕底本はここで改行がされている。しかし、『周礼』では、連続した文章のため一つにまとめた。

〔二〕「璧」、尊經閣本は「壁」に作る。

玉 05 ②

『周官』曰、「以玉作六器、以禮天地四方也。」〈蒼璧[□]禮天、黃琮[□]禮地、青珪[□]禮東、赤璋[□]禮南、白琥[□]禮西、玄璜[□]禮北方也。〉

玉 05 ③

『周官』に曰く、「玉を以て六器を作り、以て天地四方を禮するなり。」と。〈蒼璧もて天を禮し、黃琮もて地を禮し、青珪もて東を禮し、赤璋もて南を禮し、白琥もて西を禮し、玄璜もて北方を禮するなり。〉

玉 05 ④

(一)本文部分は、玉 02 と重複する。書寫の段階で誤って同文を二回書いたか。また、ここで注文となっている部分は、『周禮』春官大宗伯においては注文ではなく、本文である。

玉 06 ①

淮南子曰水員折者有珠方折者有玉〈員折者也珠陰中傷也方折者陰也玉陽中陰也皆以其類〉

玉 06 ②

『淮南子』曰、「水圓折者、有珠。方折者、有玉。」〈圓折者、〔陽〕也。珠陰中陽也。方折者、陰也。玉陽中陰也。皆以其類。〉

玉 06 ③

『淮南子』に曰く、「水の圓折する者は、珠有り。方折する者は、玉有り。」と。〈圓折する者は、陽なり。珠は陰中の陽なり。方折する者は、陰なり。玉は陽中の陰なり。皆其の類を以てす。〉

玉 06 ④

(一)『淮南鴻烈集解』卷四、墜形訓にみえる。注も漢・高誘注による。

玉 07 ①

尚書中候曰禹治水天錫玄珪告厥成功也又曰天乙東觀洛黃魚雙躍出黑鳥隨魚化為黑玉也

玉 07 ②

『尚書中候』曰、「禹治水。天錫玄珪、告厥成功也。」又曰、「天乙東觀洛。黃魚雙躍出、黑鳥隨魚、化為黑玉也。」

玉 07 ③

『尚書中候』に曰く、^(一)「禹治水す。天玄珪を錫ひ、厥の成功を告ぐるなり。」と。又曰く、^(二)「天乙東のかた洛を觀る。黃魚雙躍して出で、黑鳥魚に隨ひ、化して黑玉と爲るなり。」と。

玉 07 ④

(一)『緯書集成』でこの箇所のみを引く。出處の明記なく、『宋書』卷二七、符瑞志に同文あり。

(二)『唐開元占經』卷一二〇、黃魚躍出に『尚書尚候』からとして引用がある。ただし、天乙から洛までの部分がなく、黃魚以下の内容が一致するが、「黑鳥」「黑玉」をそれぞれ「玄鳥」「玄玉」に作る。また、『藝文類聚』卷一二、帝王部二・殷成湯、『文選』卷三一江淹「雜體詩」「幸侍觀洛後豈慕巡河前」句李善注、『太平御覽』卷八三、皇王部・殷帝成湯等にも類似文の引用あり。

玉 08 ①

孝經援神契曰玉英石華王者尊卑不先其服則出

玉 08 ②

『孝經援神契』曰、「玉英・石華、王者尊卑[□]不失其服、則出。」

玉 08 ③

『孝經援神契』に曰く、^(一)「玉英・石華、王者の尊卑 其の服を失はざれば、則ち出づ。」と。

玉 08 ④

(一)『唐開元占經』卷一一四、玉英に『孝經援神契』からとして引用がある。

玉 09 ①

孫氏瑞應圖曰玉典者王者慈仁則見也水泉流通四海合同則玄珪出

玉 09 ②

孫氏『瑞應圖』曰、「玉典者、王者慈仁、則見也。」「水泉流通、四海合同、則玄珪出。」

玉 09 ③

孫氏『瑞應圖』に曰く、^(一)「玉典は、王者慈仁なれば、則ち見るなり。」と。^(二)「水泉流通し、四海合同すれば、則ち玄珪出づ。」と。

玉 09 ④

(一)『唐開元占經』卷一一四、玉典に『瑞應圖』からとして引用がみえる。

(二)『唐開元占經』卷一一四、玄珪に『瑞應圖』からとして引用がみえる。このほか、『宋書』卷二九、符瑞志に出處明記なく「玄珪、水泉流通、四海會同、則出。闕」とあり、『魏書』卷一一二下、靈徵志の太宗永興三年（四一一）十二月の玉板が獻上された記事にも出處を明記しないで、「王者慈仁、則見」との文言がみえる。

玉 10 ①

左氏傳曰昭公廿四年十月癸酉王^[1]子龜以成周之寶玉湛于河〈爾雅曰癸川曰浮^[2]湛^レ讀曰抱也〉幾以獲神助〈幾讀曰冀之也〉甲戌津人得之河上陰不佞取將賣之則為石〈師古曰陰佞周大夫也〉是時壬子龜篡天子位萬民不卿號令不從〈師古曰卿讀白〉故有玉變近日祥〈其由在人言篇之也〉癸酉入而甲戌出神不享之驗云玉化為石貴將為賊也後二年子龜犇楚而孔〈犇古奔字〉

[一]「王」、尊經閣本は「壬」に作る。

[二]「浮」、尊經閣本は「託」に作る。

玉 10 ②

『左氏傳』曰、「昭公廿四年十月癸酉、王子鼂[□]以成周之寶玉湛于河。〈『爾雅』曰、「祭川曰浮[□]沈。」湛[□]讀曰沈也。〉幾以獲神助。〈幾讀曰冀。之也。〉甲戌、津人得之河上、陰不佞[□]取將賣之、則為石。〈師古曰、「陰〔不〕佞[□]、周大夫也。〉是時王子鼂[□]篡天子位、萬民不卿、號令不從。〈師古曰、「卿讀曰〔嚮〕。〉故有玉變、近白祥。〈其由在人言篇。之也。〉癸酉入而甲戌出。神不享之驗云。玉化為石、貴將為賤也。後二年、子鼂犇楚而死。〉〈犇、古奔字。〉

玉 10 ③

『左氏傳』に曰く、^(一)「昭公廿四年十月癸酉、王子鼂^{じやう}成周の寶玉を以て、河に湛^{しづ}む。〈『爾雅』に曰く、「川を祭るを浮沈と曰ふ。」と。湛^{ちん}は讀みて沈と曰ふなり。〉幾^{こいねが}はくは以て神助を獲んと。〈幾は讀みて冀と曰ふ。之なり。〉甲戌、津人之を河上に得、陰不佞^{うば}取りて將に之を賣らんとすれば、則ち石と爲る。〈師古曰く、「陰不佞は、周の大夫なり。」と。〉是の時王子鼂^{むか}天子の位を篡ひ、萬民卿はず、號令に従はず。〈師古曰く、「卿は讀みて嚮と曰ふ。」と。〉故に玉の變有り、白祥に近し。〈其の由は人言篇に在り。之なり。〉癸酉に入りて甲戌に出づ。神^う享けざるの驗と云ふ。玉の化して石と爲るは、貴將に賤と爲らんとすればなり。後二年、子鼂楚に犇^{はし}りて死せり。」と。〈犇は、古の奔字なり。〉

玉 10 ④

(一)『左氏傳』とあるが、實際は、『左氏傳』昭公二十四年十月の記事に基づいた『漢書』卷二十七中之上、五行志及びその顏師古注を引用している。注の一部は顏師古注によっていない。

玉 11 ①

史記秦始皇帝卅六年鄭客從關東來至華陰望見素車白馬從華山上下知其非人道注止而待之遂至〈師古曰於道上注而待此車馬也之〉持璧予鄭客曰為我遺鎬也君〈師古曰鎬池在昆明池北宜

江神古鎬池之神之始皇將死取之也之〉内言今年祖龍死〈蘇林曰祖始也龍人君象謂始皇也〉忽不見鄭客奉璧即始皇廿八年過江所湛璧是也與周子龜同應也是歲始皇死後三年秦滅也

玉 11 ②

『史記』秦始皇帝卅六年、「鄭客從關東來至華陰、望見素車白馬、從華山上下。知其非人、道住止而待之。遂至。〈師古曰、「於道上住而待此車馬。」之也。〉持璧予鄭客曰、「爲我遺鎬池君。」〈師古曰、「鎬池在昆明池北。宜江神告鎬池之神、云始皇將死。」取之。之也。〉因言、「今年祖龍死。」〈蘇林曰、「祖、始也。龍、人君象。謂始皇也。」〉忽不見。鄭客奉璧。即始皇廿八年、過江所湛璧是也。與周子龜同應也。是歲始皇死。後三年、秦滅也。」

玉 11 ③

『史記』秦始皇帝卅六年、^(一)「鄭客 關東從り來たりて華陰に至り、素車白馬の、華山の上從り下るを望見す。其の人に非ざるを知りて、道に住止して之を待つ。遂に至る。〈師古曰く、「道上に於て住まりて此の車馬を待つ。」と。之なり。〉璧を持ちて鄭客に予へて曰く、「我の爲に鎬池君に遺れ。」と。〈師古曰く、「鎬池は昆明池の北に在り。宜しく江神鎬池の神に告げて、云ふ始皇將に死せんとす。」と。之を取らず。之なり。〉因りて言ふ、「今年祖龍死す。」と。〈蘇林曰く、「祖は、始なり。龍は、人君の象。始皇を謂ふなり。」と。〉忽ち見えず。鄭客璧を奉ず。即ち始皇廿八年、江所を過りて湛めし璧は是なり。周子龜と同じ應なり。是の歲始皇死せり。後三年、秦滅ぶなり。」と。

玉 11 ④

(一)『史記』とあるが、實際は『史記』卷六始皇本紀の記事に基づいた『漢書』卷二七中之上、五行志を引用している。

玉 12 ①

瑞應圖曰王者賢良美德則白璧出

玉 12 ②

『瑞應圖』曰、「王者賢良美德、則白璧出。」

玉 12 ③

『瑞應圖』に曰く、^(一)「王者賢良にして美德あれば、則ち白璧出づ。」と。

玉 12 ④

(一)『唐開元占經』卷一一四、玉璧に『瑞應圖』として引用がある。また、『魏書』卷一一二下、靈徵志の青玉の璧が獻上された記事でも出處表記なしで、「王者賢良美德、則至。」の文言がある。

玉 13 ①

孝經援神契曰德至淵泉海出名珠〈之瑜反平〉

玉 13 ②

『孝經援神契』曰、「德至淵泉、海出明珠。」[□]〈之瑜反。平。〉

玉 13 ③

『孝經援神契』に曰く、「^(一)德 淵泉に至れば、海 明珠を出だす。」と。^(二)〈之瑜の反。平。〉

玉 13 ④

(一)『唐開元占經』卷一一四、明珠に『援神契』からとして引用がある。王者の徳が至ると祥瑞が出るという文言は、『宋書』符瑞志などにあり。

(二)『玉篇』卷一「珠」字「之俞切」、『廣韻』卷一「珠」字「章俱切」。

玉 14 ①

瑞應圖曰明珠王者不畫鱗介之物則先可以為鏡〈援神記曰有云鶴為戈人所射覆而墮參以養剝愈而放之後鶴夜致門外參執燭視之鶴銜明珠[□]參之也〉又曰王者不以則為寶則地珠出也

玉 14 ②

『瑞應圖』曰、「明珠、王者不畫、鱗介之物、則先可以為鏡。」〈『搜神記』曰、「有云、鶴為[□]戈人所射、覆而墮。參以[□]創、愈而放之。後鶴夜[□]到門外、參執燭視之、鶴銜明珠報參。」之也。〉又曰、「王者以[□]才為寶、則地珠出也。」

玉 14 ③

『瑞應圖』に曰く、「^(一)明珠、王者は不畫なれば、鱗介の物、則ち先んじて以て鏡と為すべし。」と。〈『搜神記』に曰く、「^{(二)ある}有ひと云ふ、鶴^{よくじん}戈人の射る所と為り、覆りて墮つ。參以て^{きず}創を養ひ、愈えて之を放つ。後鶴夜門外に到り、參燭を執りて之を視れば、鶴明珠を銜へて參に報ゆ。」と。之なり。〉又曰く、「^(三)王者才を以て寶と為せば、則ち地珠出づるなり。」と。

玉 14 ④

(一)『唐開元占經』卷一一四、明珠に『瑞應圖』からとして引用があるが、文が大幅に異なる。

(二)『搜神記』卷二〇・四五一話にみえる。他、『藝文類聚』卷八四、寶玉部下・珠、『白孔六帖』卷九四、鶴、『太平御覽』卷四七九、人事部一二〇・報恩、卷八〇三、珍寶部二・珠等、『搜神記』からとして多數引用あり。

(三)『唐開元占經』卷一一四、明珠に『瑞應圖』からとして引用がある。

玉 15 ①

孝經援神契曰王者事神明得理則瑠璃見〈刀鳩反力支反平〉

玉 15 ②

『孝經援神契』曰、「王者事神明、得理、則瑠璃見。」[●]〈[●]力鳩反。力支反。平。〉

玉 15 ③

『孝經援神契』に曰く、「^(一)王者は神明に事へ、理を得れば、則ち瑠璃^{あらは}見る。」と。〈力鳩の反。力支の反。平。〉

玉 15 ④

(一)このみにみられる文(『緯書集成』による)。あらわれるものを示す文字が判讀しがたいが、つけられる反切注および次の條の内容からすれば、「瑠璃」の可能性はある。「留」字は、『玉篇』卷二「略周切」、『廣韻』卷二「力救切」の音注であり、他、「留」のつくりを持つ字には「力九切」の反切注がよくみられる(『玉篇』卷一五「瞿」字など)。また、「璃」字の『玉篇』卷一における反切は「力支切」である。『緯書集成』は「璊」字を「瑾」字と釋讀しているが、反切があわない。瑠璃だとした場合、『唐開元占經』卷一一四、琉璃碧の「『援神契』云、王者行政、神明得理、則琉璃碧見」がほぼ同内容の文となる。

玉 16 ①

瑞應圖曰碧瑠璃王者不隱遇則見也〈物志曰色如雲母色如紫玉光曜如燭離如蟬內積女水里槃也魏略曰大秦曰出赤白黒黄青緑紺縹紅紫十種瑠璃之也〉

玉 16 ②

『瑞應圖』曰、「碧瑠璃、王者不隱遇、則見也。」〈『物志』曰、「色如雲母。色如紫玉。光曜如燭、離如蟬。內積女水里槃也。」『魏略』曰、「大秦曰、『出赤・白・黒・黄・青・緑・紺・縹・紅・紫十種瑠璃。』」之也。〉

玉 16 ③

『瑞應圖』に曰く、^(一)「碧瑠璃、王者隱遇せざれば、則ち見るるなり。」と。〈『物志』に曰く、^(二)「色雲母の如し。色紫玉の如し。光^{かがや}曜くこと燭の如く、離るれば蟬の如し。內積女水里槃なり。」と。『魏略』に曰く、^(三)「大秦曰く、『赤・白・黒・黄・青・緑・紺・縹・紅・紫十種の瑠璃を出だす。』」と。之なり。〉

玉 16 ④

(一)『唐開元占經』卷一一四、瑠璃碧に『瑞應圖』からとして引用があるが「隱遇」を「不匱」に作る。またこの文は貝 04 にも引用がある。

(二)『物志』は出典未詳。書名自体も未詳。『博物志』あるいは『異物志』を指すか。『博物志』は張華撰。『異物志』は、『隋志』史部地理類に『異物志』一卷後漢議郎楊孚撰、『南州異物志』一卷吳丹陽太守萬震撰、『交州異物志』一卷楊孚撰、『扶南異物志』一卷朱應撰、『臨海水土異物志』一卷沈瑩撰と『異物志』の名称を含む書名が複数みえる。

(三)『藝文類聚』卷八四、寶玉部下瑠璃に『魏略』からとして引用がある。他、『漢書』卷九六、西域傳罽賓國「(出)璧流離」部分顔師古注、『太平御覽』卷七九二、四夷部一三・大秦、『太平御覽』卷八〇八、珍寶部七・琉璃など引用多數あり。

玉 17 ①

孝經援神契曰珊瑚鈎〈𦉰干反。古都反。平。〉王者恭信則見一本曰不珍弄則出〈說文色赤珠生於海及山中〉

玉 17 ②

『孝經援神契』曰、「珊瑚鈎。〈𦉰干反。古都反。平。〉王者恭信、則見。一本曰不珍弄、則出。」〈『說文』、「色赤。珠生於海及山中。」〉

玉 17 ③

『孝經援神契』に曰く、^(一)「珊瑚鈎。^(二)〈𦉰干の反。古都反。平。〉王者恭信なれば、則ち見る。一本に曰く、珍弄せざれば、則ち出づ。」と。〈『說文』、^(三)「色赤なり。珠海及び山中に生ず。」と。〉

玉 17 ④

- (一) 『唐開元占經』卷一一四、珊瑚鈎、『太平御覽』卷八〇七、珍寶部六・珊瑚では『瑞應圖』からとして引用する。
- (二) 『玉篇』卷一「珊」字「山安切」、『廣韻』卷一「珊」字「蘇干切」。『玉篇』卷一「瑚」字「何孤切」、『廣韻』卷一「瑚」字「戸吳切」、「𦉰干反」「古都反」の反切用例はなし。
- (三) 『說文解字』珊字にみえる。

玉 18 ①

又曰王者德至山陵而黑丹出山海經曰有玄丹之山多有黑丹狀如黑玉在山陵也

玉 18 ②

又曰、「王者德至山陵、而黑丹出。」『山海經』曰、「有玄丹[□]之山。」多有黑丹。狀如黑玉[●]、在山陵也。

玉 18 ③

又(『孝經援神契』)に曰く、^(一)「王者の德 山陵に至れば、黒丹出づ。」と。『山海經』に曰く、^(二)「玄丹の山有り。」と。^(三)多く黒丹有り。狀は黒玉の如くして、山陵に在るなり。

玉 18 ④

- (一) 『山海經』卷一六、大荒西經の郭璞注に『孝經援神契』からとして引用がある。『文選』卷三、張衡「東京賦」「溫液湯泉、黒丹石縞」句李善注、『太平御覽』卷九八五、藥部二・丹にも『孝經援神契』からとして引用がある。
- (二) 『山海經』卷一六、大荒西經にみえる。
- (三) (二) の『山海經』郭璞注に「出黒丹也。」とある。

玉 19 ①

瑞應圖曰王者五常終則玉黃出

玉 19 ②

『瑞應圖』曰、「王者五常終、則玉黃出。」

玉 19 ③

『瑞應圖』に曰く、「^(一)王者の五常もて終れば、則ち玉黄出づ。」と。

玉 19 ④

(一)『唐開元占經』卷一一四、玉璜に『瑞應圖』からとして引用がある。

玉 20 ①

淮南子曰盛徳之君仁者得大則流黄出

玉 20 ②

『淮南子』曰、「盛徳之君、仁者得大、則流黄出。」

玉 20 ③

『淮南子』に曰く、「^(一)盛徳の君、仁者得ること大なれば、則ち流黄出づ。」と。

玉 20 ④

(一)『淮南鴻烈集解』卷八、本經訓にみえる。「盛徳之君、仁者得大」の文言はなく、「太清之始」の状態になった時の諸現象の中に「流黄出」が含まれる。『唐開元占經』卷一一二、朱草に『淮南子』からとして引用がある。

玉 21 ①

援神契曰神露孳隨百寶為用則琅玕景王者徳礼之制則谷有白玉君乗金而王其政象平則紫玉見深山王者慈仁則王典見也

玉 21 ②

『援神契』曰、「[□]神[□]靈[□]孳[□]髓、[□]百[□]寶[□]為[□]用、則琅玕景。」[□]「王者徳禮之制、則谷有白玉。」[□]「君乗金而王、其政象平、則紫玉見深山。」[□]「王者慈仁、則玉典見也。」

玉 21 ③

『援神契』に曰く、「^(一)神靈孳髓、百寶用を為せば、則ち琅玕^{かがや}景く。」と。^(二)「王者の徳禮の制あれば、則ち谷に白玉有り。」と。^(三)「君^{かた}金に乗じて王たりて、其の政平に象どれば、則ち紫玉深山に^{あらは}見る。」と。^(四)「王者慈仁なれば、則ち玉典見るるなり。」と。

玉 21 ④

(一)『唐開元占經』卷一一四、白玉に『孝經援神契』からとして引用あり。

(二)『太平御覽』卷七二、地部三七・澤に『禮記稽命徴』からとして引用がある。『初學記』卷二七、寶器部・玉、『唐開元占經』卷一一四、白玉、『太平御覽』卷八〇四、珍寶部三・玉は『禮記稽命徴』からとする文で白玉のみの出現をしるす。『唐開元占經』では、(一)の白玉の引用文と連続している。

(三)『藝文類聚』卷八三、寶玉部上・玉に『禮斗威儀』からとして引用がある。『太平御覽』卷八〇四、珍寶部三・玉にもみえる。『太平御覽』では(二)の『禮記稽命徴』に引き

續いて引用される。「其政（象）平」の文言も、『禮斗威儀』佚文に頻出している。『緯書集成』を参照。

（四）『唐開元占經』卷一一四、玉典に『瑞應圖』からしてみえる。玉 09 に既出。

一九、 貝

【概要】

『爾雅』の引用が長いが、『爾雅』のもとのテキストも亂れており、それがさらに亂れた形で引用され、非常にわかりにくいものとなっている。

貝 01 ①

貝〈捕蓋反去〉

貝 01 ②

貝〈捕蓋反。去〉

貝 01 ③

貝^(一)〈捕蓋の反。去。〉

貝 01 ④

（一）『玉篇』卷二五「貝」字「布外切」、『廣韻』卷四「貝」字「布蓋切」。「捕蓋反」の反切注例はなし。

貝 02 ①

尔雅曰貝居陸曰焱在蝸水^{〔一〕}〈姑含反宐如枅有頭尾目之也〉大者就小者鱗〈音積今之俚貝有紫色出日南〉尚書大傳曰大貝若大車之渠^{〔二〕}車輞良謂此也今之紫貝大如酒盃之也〈已上注字欵〉^{〔三〕}餘蚺黃質白文〈音坂〉餘衆白質黃文蚺博而顙〈音葩一普匡之玃反中央黃兩頭銑者也〉蝸大而冷〈音回冷謂行曲之也〉

〔一〕「蝸水」の二文字、一文字のように書かれる。

〔二〕この注文は、本文脇に書かれる。

貝 02 ②

『爾雅』曰、「貝居陸曰焱、在水^{□□}蝸。〈姑含反。肉如枅、有頭尾目。之也。〉大者[□]魴。小者[□]鱗〈音積。今之細貝有紫色。出日南。〉『尚書大傳』曰、「大貝若大車之渠。」^{□□}車渠輞良謂此也。今之紫貝、大如酒盃。之也。〈已上注字歟。〉餘[□]𧈧、黃質白文。〈音坂。〉餘[□]泉、白質黃文。蚺、博而顙。〈音葩。一普匡之玃反。中央黃、兩頭^{□□}銳者也。〉^{□□}蝸大而^{□□}險〈音回。險謂汚薄。之也。〉

貝 02 ③

『爾雅』に曰く、「^(一)貝の陸に居るを焱と曰ひ、水に在るを蝸といふ。〈姑含の反。肉は枅の如く、頭尾目有り。之なり。〉大なる者は魴。小なる者は鱗。〈音は積。今の細貝に紫色有り。〉

日南に出づ。〉『尚書大傳』に曰く、「大貝は大車の渠の若し。」と。車渠輞は良に此れを謂ふなり。今の紫貝、大いなること酒盃の如し。之なり。〈已上は注字か。〉餘貶は、黃質白文なり。〈音は坂。〉餘泉は、白質黃文なり。蚘は、博にして類^{かい}なり。〈音は葩。一普匡之玃反。中央廣く、兩頭鋭き者なり。〉蝸は大にして險なり。〈音は回。險は汚薄を謂ふ。之なり。〉」と。

貝 02 ④

(一)『爾雅』卷九、釋魚第十六にみえる。音注以外の注は、『爾雅』郭璞注とほぼ同じ。

貝 03 ①

本草經曰貝子一名貝齒生東海

貝 03 ②

『本草經』曰、「貝子一名貝齒。生東海。」

貝 03 ③

『本草經』に曰く、「^(一)貝子是一名貝齒。東海に生ず。」と。

貝 03 ④

(一)『藝文類聚』卷八四、寶玉部下・貝にみえる。また、『太平御覽』卷八〇七、珍宝部六・貝にも同文あり。宋・唐慎微『證類本草』卷二二、貝子にも「一名貝齒。生東海池澤。」とある。

貝 04 ①

瑞應圖曰王者不貪則大貝出

貝 04 ②

『瑞應圖』曰、「王者不貪、則大貝出。」

貝 04 ③

『瑞應圖』に曰く、「^(一)王者貪らざれば、則ち大貝出づ。」と。

貝 04 ④

(一)『唐開元占經』卷一一四、大貝に『瑞應圖』からとして引用がある。

二〇、 蘓胡鈎

【概要】

卷頭の目次には見出しがあるが、本文では、見出しとして改行されておらず、貝の末尾に續けて書かれている。また、見出し三文字と『瑞應圖』ではじまる引用文の間に臺にのった鳥の繪がある（【圖 1】）。蘓胡鈎に関する記事は、すでに玉 17 にもあり、本文の順序が混亂していた可能性がある。



圖 1 鳥

蘓胡鈎 01 ①

蘇胡鈎 瑞應圖曰王者恭信則至一本珊瑠鈎也

蘓胡鈎 01 ②

蘇胡鈎 『瑞應圖』曰、「王者恭信、則至。」一本珊瑠鈎也。

蘓胡鈎 01 ③

蘇胡鈎 『瑞應圖』に曰く、^(一)「王者恭信なれば、則ち至る。」と。一本は珊瑠鈎とするなり。

蘓胡鈎 01 ④

(一) 『唐開元占經』 卷一一四、蘇胡に『瑞應圖』 からとして引用がある。

二一、 山

【概要】

緯書や『漢書』五行志などからの引用でなりたつ。山の災害に関する記事を主とする。

山 01 ①

春秋從題辭曰山之為言宣也含澤布氣調五神也〈言山者氣之苞所也^[1]含精藏雲故觸石而出之也〉國語曰禹封九山者土之聚也爾雅曰山大而高曰山松〈思降反〉小而高曰岑〈仕金反〉句^[2]草木曰岵〈胡覩反〉無草木曰岐^[3]〈去礼^[4]反云^[5]比反〉石戴土謂之催嵬〈牛廻反〉土戴石為砢^[6]〈且居反〉

[1] 尊經閣本は「以」に作る。

[2] 底本の文字は多の草體で書かれる。

[3] 底本の文字は岐の草體で書かれる。

[4] 尊經閣本は「糺」に作る。

[5] 尊經閣本は「爰」に作る。

山 01 ②

『春秋說題辭』曰、「山之爲言、宣也。含澤布氣、調五神也。」〈言山者氣之苞、所以含精藏雲。故觸石而出。之也。〉『國語』曰、「禹封九山。山者土之聚也。』『爾雅』曰、「山大而高曰[□]崧。〈思降反。〉小而高曰岑。〈仕金反。〉多草木曰岵。〈胡覩反。〉無草木曰岐。〈去糺[○]反。亦比反。〉石戴土謂之催嵬。〈牛廻反。〉土戴石爲砢。〈且居反。〉」

山 01 ③

『春秋說題辭』に曰く、^(一)「山の言爲るや、宣なり。澤を含み氣を布き、五神を調ふるなり。」と。^(二)〈言ふところ山は氣の苞、精を含み雲を藏する所以なり。故に石に觸るれば出だす。之なり。〉『國語』に曰く、^(三)「禹九山を封ず。山は、土の聚まるなり。」と。『爾雅』に曰く、^(四)「山大にして高きを崧と曰ふ。^(五)〈思降の反。〉小にして高きを岑と曰ふ。^(六)〈仕金の反。〉草木多きを岵と曰ふ。^(七)〈胡覩の反。〉草木無きを岐と曰ふ。^(八)〈去糺の反。亦比の反。〉石の土を戴する之を催嵬と謂ふ。^(九)〈牛廻の反。〉土の石を戴するを砢と爲す。^(一〇)〈且居の反。〉」と。

山 01 ④

- (一)『藝文類聚』卷七、山部・總載山に『春秋說題辭』、『國語』、『爾雅』とすべて引用がある。注の部分も同書に『春秋元命苞』からとして引用される文。他『初學記』卷五、地理上・總載山、『太平御覽』卷三八、地部三・叙山、『水經注』卷四〇、漸江水などにも同様に連続して引用する例あり。
- (二)(一) 参照。『春秋元命苞』の佚文。
- (三)(一) 参照。『國語』卷三、周語下「夫山、土之聚也。」／「(伯禹)封崇九山。」あり。
- (四)すべて『爾雅』卷七、釋山第一一にみえる。
- (五)『玉篇』卷二二「崧」字「思融切」、『廣韻』卷一「崧」字「息弓切」。「思降反」の反切注例はなし。
- (六)『玉篇』卷二二「岑」字「士今切」、『廣韻』卷二「岑」字「鋤針切」。『經典釋文』卷一四「岑」字「仕金反」。
- (七)『玉篇』卷二二「帖」字「胡古切」、『廣韻』卷三「帖」字「侯古切」。「胡覩反」の反切注例はなし。
- (八)『玉篇』卷二二「峽」字「古來切」、『廣韻』卷一「峽」字「古哀切」。「去紕反」、「亦比反」の反切注例はなし。
- (九)『玉篇』卷二二「嵬」字「午回切」、『廣韻』卷一、卷三「嵬」字「五灰切」。
- (一〇)『玉篇』卷二二「𡵓」字「且居切」、『廣韻』卷一「𡵓」字「七余切」。

山 02 ①

漢書曰昔僖公十四年秋八月沙麓崩繫梁傳曰林屬於山曰麓沙其各^[1]也劉向以為臣下背叛散落不事上之象也志是參桓行伯道會諸侯〈伯讚曰霸也之〉事周室以官仲既死桓德日衰天戒若曰伯道將廢諸侯散落陪臣執命臣下不事上矣桓公不寤天子蔽晦〈師古曰被掩蔽而暗也〉及參桓死天下散而從楚王札子殺二大夫〈師古曰邵伯毛伯是也〉晉敗天子之師〈師古曰謂敗之於質戒也〉莫能征討從是陵遲公羊以為沙麓河上邑也董仲舒曰河大川象參大國桓德衰伯道將移於晉文故何為之徙也左氏以為沙麓晉地沙山名也地震而麓崩不書震舉重者也伯陽甫所謂國必依山崩川錫亡之徵也不過十年也至廿四年晉懷公殺於高梁〈師古曰文公入回而便殺之高梁晉地之也〉京房易伝曰小人剥盧〈剥封上九刮也〉厥妖山崩謂陰乘陽弱勝強又漢書元后傳曰昔沙麓崩晉史卜之曰陰為陽雄土火相乘後六百卅五年宜有聖女興乎〈張宴曰陰數八、六十四云數故六百卅五年至漢哀帝元壽二年帝崩元后始攝政也果當六百卅五年元后始有德明年為攝政也季奇曰陰元后也陽漢也〉

[1] 尊經閣本は「名」に作る。

02 ②

『漢書』曰、「昔[□]釐公十四年秋八月、沙麓崩。『穀梁傳』曰、『林屬於山曰麓、沙其名也。』劉向以為臣下背叛、散落不事上之象也。[□]先是[□]齊桓行伯道、會諸侯〈伯讚曰霸。之也。〉事周室。以[□]管仲既死、桓德日衰。天戒若曰、『伯道將廢、諸侯散落、陪臣執命、臣下不事上矣。』桓公

不寤、天子蔽晦。〈師古曰、『被掩蔽而暗也。』〉及齊桓死、天下散而從楚。王札子殺二大夫。〈師古曰、『邵伯・毛伯。』是也。〉晉敗天子之師、〈師古曰、『謂敗之於質戎也。』〉莫能征討、從是陵遲。『公羊』以爲沙麓、河上邑也。董仲舒曰、『河、大川象。齊大國。桓德衰、伯道將移於晉文、故河、爲之徙也。』左氏以爲沙麓、晉地、沙山名也。地震而麓崩。不書震、舉重者也。伯陽甫所謂「國必依山、山崩川竭、亡之徵也。不過十年也。」至廿四年、晉懷公殺於高梁。〈師古曰、『文公入國而使殺之。高梁、晉地。』之也。〉京房『易傳』曰、『小人剥盧〈剥卦、上九爻也。〉厥妖、山崩。謂陰乘陽、弱勝強。』又『漢書』元后傳曰、「昔沙麓崩、晉史卜之曰、『陰爲陽雄、土火相乘、後六百卅五年、宜有聖女興乎。』」〈張宴曰、『陰數八八六十四、土數〔五〕。故六百卅五年。至漢哀帝元壽二年、帝崩、元后始攝政也。果當六百卅五年。』元后始有德、明年爲攝政也。李奇曰、『陰、元后也。陽、漢也。』〉」

山 02 ③

『漢書』に曰く、^(一)「昔釐公十四年秋八月、沙麓崩る。『穀梁傳』に曰く、『林の山に屬くを麓と曰ひ、沙は其の名なり。』と。劉向以爲らく臣下背叛し、散落して上に事へざるの象なり。是れより先齊桓伯道を行ひ、諸侯に會ひ〈伯讚は覇と曰ふ。之なり。〉周室に事ふ。管仲の既に死するを以て、桓の徳日びに衰ふ。天戒めて、『伯道將に癯れんとし、諸侯散落し、陪臣執命するは、臣下上に事へざるなり。』と曰ふが若し。桓公寤らず、天子蔽晦す。〈師古曰く、『掩蔽せられて暗きなり。』と。〉齊桓死するに及び、天下散じて楚に従ふ。王札子二大夫を殺す。〈師古曰く、『邵伯・毛伯なり。』と。是なり。〉晉天子の師を敗り、〈師古曰く、『之を質戎に敗るを謂ふなり。』と。〉能く征討する莫し。是れ從り陵遲す。『公羊』以爲らく沙麓は、河上の邑なり。董仲舒曰く、^(二)「河は、大川の象なり。齊は大國なり。桓の徳衰へ、伯道將に晉文に移らんとし、故に河、之が爲に徙るなり。』と。左氏以爲らく沙麓は、晉の地、沙は山名なり。地震へ麓崩る。震と書せざるは、重きを舉ぐる者なり。伯陽甫の所謂る「國の必ず山に依り、山崩れ川竭くるは、亡の徵なり。十年を過ぎざるなり。」と。廿四年に至り、晉懷公高梁に殺さる。〈師古曰く、『文公國に入りて之を殺さしむ。高梁は、晉地なり。』と。之なり。〉京房『易傳』に曰く、『小人^{いほり}盧を剥ぐ〈剥卦、上九の爻なり。〉、厥の妖は、山崩る。陰陽に乘じ、弱強に勝るを謂ふ。』と。又『漢書』元后傳に曰く、^(三)「昔沙麓崩れ、晉史之を卜して曰く、『陰陽雄と爲り、土火相乘し、後六百卅五年、宜しく聖女の興る有るべし。』と。〈張宴曰く、『陰數、八八六十四、土數は五なり。故に六百卅五年なり。漢哀帝元壽二年に至り、帝崩じ、元后始めて攝政するなり。果して六百卅五年に當たる。』と。元后始めて徳有れば、明年攝政を爲す。李奇曰く、『陰は、元后なり。陽は、漢なり。』〉」と。

山 02 ④

- (一)『漢書』卷二七下之上、五行志にみえる。
- (二)この箇所、『漢書』五行志では、「一曰」として引かれる箇所であり、董仲舒の解釋ではない。
- (三)『漢書』卷九八、后妃傳にみえる。

山 03 ①

成公五年憂梁山崩穀梁傳曰壅河三日流晉君師群臣而哭之西流劉向以為山陽君也水陰民也天戒若曰君道崩壞下飢百姓將失其所矣哭然後喪流亡象也後晉暴殺三卿厲公以弑〈師古曰三卿謂卻犇卻錡卻至也又殺公事十六年也之〉劉歆以為梁山晉望也崩絕〈施欽〉^[1]崩也〈師古曰言漸解散也施音式尔反也之〉古者三代命礼祭不越望吉凶禍福不是過也國主山川山崩川竭亡之徵也美惡周必復〈師古曰復音扶曰反〉是^レ在鶉火至十七年復在鶉火欒書中行偃弑厲公而立悼公〈守曰歲謂歲星也在張故鶉火之也〉

[1] この注文は、本文脇に書かれる。

山 03 ②

成公五年、夏梁山崩。『穀梁傳』曰、「壅河三日〔不〕流。晉君帥群臣而哭之、乃流。」劉向以為山陽、君也。水陰、民也。天戒若曰、「君道崩壞、下亂、百姓將失其所矣。」哭然後流、喪亡象也。後晉暴殺三卿、厲公以弑。〈師古曰、「三卿謂卻犇、卻錡、卻至也。又殺公、事十七年」之也。〉劉歆以為梁山、晉望也。崩、弛崩也。〈師古曰、「言漸解散也。弛音式尔反」之也。〉古者三代命祀、祭不越望、吉凶禍福、不是過也。國主山川、山崩川竭、亡之徵也。美惡周必復。〈師古曰、「復音扶目反」〉是歲、歲在鶉火、至十七年復在鶉火。欒書、中行偃弑厲公而立悼公。〈守曰、「歲謂歲星也。在張。故鶉火」之也。〉

山 03 ③

成^(一)公五年、夏梁山崩る。『穀梁傳』に曰く、「河を壅ぎて三日流れず。晉の君群臣を帥めて之を哭し、乃ち流る。」と。劉向以為らく山は陽にして、君なり。水は陰にして、民なり。天戒めて、「君道崩壊し、下亂れ、百姓將に其の所を失はんとす。」と曰ふが若し。哭して然る後に流るるは、喪亡の象なり。後に晉三卿を暴殺され、厲公以て弑さる。〈師古曰く、「三卿は卻犇、卻錡、卻至を謂ふ。又公を殺すは、事十七年なり。」と。之なり。〉劉歆以為らく梁山は、晉の望なり。崩は、弛崩なり。〈師古曰く、「漸く解散するを言ふなり。弛の音は式尔の反なり。」と。之なり。〉古三代の命祀、祭は望を越えず、吉凶禍福は、是れを過ぎざるなり。國の主どるものは山川にして、山崩れ川竭くるは、亡の徵なり。美惡は周^{めぐ}りて必ず復^{かへ}る。〈師古曰く、「復の音は扶目の反。」と。〉是の歲、歲は鶉^{じゆん}火に在り、十七年に至り復た鶉火に在り。欒書、中行偃は厲公を弑し悼公を立つ、と。〈守曰く、「歲は歲星を謂ふなり。張に在り。故に鶉火なり。」と。之なり。〉

山 03 ④

- (一) 『漢書』卷二七下之上、五行志にみえる。
(二) 『春秋穀梁傳』成公五年にみえるが、注(一)の通り『漢書』五行志本文によっている。

山 04 ①

文帝元年四月參楚地山廿九所同日俱大發水潰出劉向以為近水沘古也〈由在人思心篇也〉天

戒若曰句盛參楚之君今先制度將為亂後十六年帝庶兄參悼惠王之孫文王則薨無子帝兮泰地立悼惠王庶子六人皆為王賈誼諫以為違古制恐為亂至景帝三年參楚七國起兵百餘萬漢皆破之春秋四國同日災〈師古曰宋衛陳鄭〉漢七國同日衆山潰咸被其害不畏天威之明郊也

山 04 ②

文帝元年四月、齊楚地山廿九所同日俱大發水、潰出。劉向以為近水^{やぶ}土也。〈由在人思心篇也。〉天戒若曰、「勿盛齊楚之君。今先制度、將為亂。」後十六年、帝庶兄齊悼惠王之孫文王則薨、無子、帝分齊地、立悼惠王庶子六人皆為王。賈誼諫、以為違古制、恐為亂。至景帝三年、齊楚七國起兵百餘萬、漢皆破之。春秋四國同日災。〈師古曰、「宋、衛、陳、鄭。」〉漢七國、同日衆山潰、咸被其害、不畏天威之明効也。

山 04 ③

(一) 文帝元年四月、齊楚の地山廿九所同日俱に大いに水を發し、潰出す。劉向以為らく水土を^{やぶ}滲るに近きなり。〈由は人思心篇に在るなり。〉天戒めて、「齊楚の君を盛んにする勿れ。今制度に先んずれば、將に亂を為さんとす。」と曰ふが若し。後十六年、帝の庶兄齊悼惠王の孫文王則薨じ、子無く、帝齊の地を分け、悼惠王の庶子六人を立てて皆王と為す。賈誼諫めて、以て古制に違ひ、亂を為すを恐ると為す。景帝三年に至り、齊楚七國兵百餘万を起こし、漢皆之を破る。春秋四國同日に災あり。〈師古曰く、「宋、衛、陳、鄭なり。」と。〉漢七國、同日に衆山潰へ、咸其の害を被るは、天威を畏れざるの明らかなる効なり。

山 04 ④

(一)『漢書』卷二七下之上、五行志にみえる。

山 05 ①

國語曰幽王二年西周三川皆震岐山甫伯陽父曰周將亡矣〈事在地篇〉

山 05 ②

『國語』曰、「幽王二年、西周三川皆震、岐山崩。伯陽父曰、『周將亡矣。』」〈事在地篇。〉

山 05 ③

『國語』に曰く、(一)「幽王二年、西周三川皆震へ、岐山崩る。伯陽父曰く、『周將に亡びんとするなり。』」と。〈事は地篇に在り。〉

山 05 ④

(一)『國語』卷一、周語上にみえる。

山 06 ①

京氏別對災異曰山崩何山者三公之位公輔之德也乃興出兩侵既万物為天成功今崩者此謂大臣壞不畔忠也不救則蝗虫大起其救也明服設誦佐紂不虫公卿進賢良經曰兼為退孔子曰救之以思不出其位也〈王弼若各正其所不侵害也〉明三公有思奪上之位乃致山崩矣以冬十一月崩此降民相從而行一云釁以夏崩人主有亡者天下大水行以秋崩有兵戰以春二月崩其色戰一云有折城山隤然

自移天下有兵社稷亡山移臣下變古易常山無故自下伯天下兵作山无故增^[1]高大出天下水且至傷人

[1] 尊經閣本は「憎」に作る。

山 06 ②

京氏別對災異曰、「山崩何。山者、三公之位、公輔之德也。乃興〔雲〕出雨、既萬物爲天成功。今崩者、此謂大臣懷[□]叛[□]不忠也。不救、則蝗虫大起。其救也、明服設誦。佐拙不忠、公卿進賢良。經曰『兼山、艮』。孔子曰、『救之以思、不出其位也。』〈王弼、『若各正其所、不侵害也。』〉明三公有思奪上之位、乃致山崩矣。以冬十一月崩、此降民相從而行。一云餓。以夏崩、人主有亡者、天下大水行。以秋崩、有兵戰。以春二月崩、其邑戰。一云、有折城山、嘿然自移、天下有兵、社稷亡。山移臣下、變古易常。山無故自下低、天下兵作。山無故增高、出天下水、且至傷人。」

山 06 ③

京氏『別對災異』に曰く、^(一)「山崩るるは何ぞ。山は、三公の位、公輔の徳なり。乃ち雲を興し雨を出だせば、既に萬物天の爲に功を成す。今崩るるは、此れ大臣叛を懷きて忠ならざるを謂ふ。救はざれば、則ち蝗虫大いに起こる。其の救は、服を明らかにし誦を設く。忠ならざるを拙くを^{たす}佐け、公卿賢良を進む。經に曰く、^(二)『兼山は、艮』と。孔子曰く、^(三)『之を救ひて以て思へば、其の位より出でざるなり。』と〈王弼、^(四)『若し各の其の所を正しくすれば、侵害せざるなり。』と。〉三公の上の位を奪はんとする思ひ有るを明らかにし、乃ち山崩を致すなり。^(五)冬十一月を以て崩るるは、此れ降民相從ひて行く。一に餓と云ふ。夏を以て崩るるは、人主に亡者有り、天下大水行はる。秋を以て崩るるは、兵戰有り。春二月を以て崩るるは、其の邑戰ふ。一に云ふ折城山有り、嘿然として、自ら移れば、天下に兵有り、社稷亡ぶ。山臣下に移れば、古きを變へ常を易ふ。山故無く自ら下低すれば、天下の兵作^おこる。山故無く高大なるを増せば、天下の水を出だし、且つ人を傷つくるに至る。」と。

山 06 ④

(一)「～不忠」まで、『唐開元占經』卷九九、山崩に『京房對災異』からとする類似文あり。

(二)『周易』艮にみえる。

(三)『論語』憲問にみえる。曾子の語。

(四)王弼『論語釋疑』(佚書)からの引用かと思われるが、『玉函山房輯佚書』に同文なし。

(五)『唐開元占經』卷九九、山崩に引用される京房『易妖占』に類似した内容がみえる。

山 07 ①

瑞應圖曰慶山者王志德茂則生也

山 07 ②

瑞應圖曰、「慶山者、王志德茂、則生也。」

山 07 ③

『瑞應圖』に曰く、^(一)「慶山は、王の志徳茂れば、則ち生ずるなり。」と。

山 07 ④

(一)『文苑英華』卷六一二、張説「爲留守作奏慶山醴泉表」武后に『孫氏瑞應圖』からとして引用あり。

二二、 石

【概要】

緯書や『漢書』、『晉書』五行志などからの引用でなりたつ。石にまつわる災異や、石の變形、出現などについての記事を主とする。

石 01 ①

石〈時亦反入〉

石 01 ②

石〈時亦反。入。〉

石 01 ③

石^(一)〈時亦の反。入。〉

石 01 ④

(一)『玉篇』卷二二「石」字「市亦切」、『廣韻』卷五「石」字「常隻切」。

石 02 ①

物理論曰土精爲石

石 02 ②

『物理論』曰、「土精爲石。」

石 02 ③

『物理論』に曰く、^(一)「土精は石と爲る。」と。

石 02 ④

(一)『初學記』卷五、地理上・石に『物理論』からとして同文がある。他『藝文類聚』卷六、地部・石、『太平御覽』卷五二、地部一七・石（『初學記』と同文）などにも引用あり。

石 03 ①

禮含文嘉曰内外之制各得其宜則山澤出靈龜寶石〈魏氏春秋曰青龍三年刪丹縣金山川水溢寶石貝置狀於靈龜廣一丈六尺長一丈七尺是也〉

石 03 ②

石 03 ③

石 03 ④

石 04 ①

石 04 ②

石 04 ③

石 04 ④

石 05 ①

– 25 –

讎動於民則有非言之物而今宮室崇侈民力彫盡於是晉方崇虎祁之宮〈虎祁地名卅里宮也〉叔向曰子野之言君子哉〈子野者師廣名之也〉

石 05 ②

『左氏傳』曰、「昭公八年春、石言于晉魏柯。〈魏柯者、晉地名。〉」晉侯問於師廣曰、『石何故言。』對曰、『石不能言、或馮焉。〈謂有精神、馮依石而言耳也。〉不然、民聽濫。〈濫、失也。〉抑臣又聞〈抑、疑辭也。〉曰、「作事、不時、怨讐動於民、則有非言之物而〔言〕。今宮室崇侈、民力彫盡。於是晉方築虎祁之宮。」〈虎祁、地名。卅里宮也。〉叔向曰、『子野之言、君子哉。』〈子野者、師廣名。之也。〉」

石 05 ③

『左氏傳』に曰く、「^(一)昭公八年春、石 晉の魏柯に言ふ。〈魏柯は、晉の地名なり。〉晉侯師廣に問ひて曰く、『石何の故に言ふ。』と。對へて曰く、『石言ふ能はず、或いは焉に馮くか。〈謂ふところ精神有りて、石に馮依して言ふのみなり。〉然らざれば、民聽くことの濫ならん。〈濫は、失なり。〉抑も臣又聞きて〈抑は、疑辭なり。〉曰く、「事を作すに、時ならずして、怨讐民に動けば、則ち非言の物にして言ふ有り。」と。今宮室侈を崇し、民力彫盡す。是に於て晉方^{まさ}に虎祁の宮を築く。』と。〈虎祁は、地名なり。卅里宮なり。〉叔向曰く、『子野の言、君子かな。』〈子野は、師廣の名なり。之なり。〉」と。

石 05 ④

(一)『春秋左氏傳』昭公八年にみえる。注も杜預注による。同内容は『漢書』卷二七上、五行志にもみえるが、こちらの本文・注は利用されていない。

石 06 ①

漢書五行志曰成帝鴻嘉三年五月天水冀南山大石鳴聲降^レ如雷野雞皆鳴石長丈三尺廣略等名曰鼓^レ鳴有兵

石 06 ②

『漢書五行志』曰、「成帝鴻嘉三年五月、天水冀南山大石鳴。聲隆隆如雷。野雞皆鳴。石長丈三尺、廣略等。名曰鼓。鼓鳴有兵。」

石 06 ③

『漢書五行志』に曰く、「^(一)成帝鴻嘉三年五月、天水冀南山大石鳴る。聲隆隆として雷の如し。野雞皆鳴く。石の長さ丈三尺、廣さ略^ほぼ等し。名を鼓と曰ふ。鼓鳴れば兵有り。」と。

石 06 ④

(一)『漢書』卷二七上、五行志にみえる。

石 07 ①

益部老目舊傳曰公孫時蜀武儋山石折住文公曰噫西州智士死我將死後三日果死也

石 07 ②

『益部耆舊傳』曰、「公孫時、蜀武擔山石折。任文公曰、『噫西州智士死、我將死。』後三日果死也。」

石 07 ③

『益部耆舊傳』に曰く、「^(一) 公孫の時、蜀の武擔山の石折る。任文公曰く、『噫西州の智士死せり、我も將に死せんとす。』と。後三日果して死せるなり。」と。

石 07 ④

(一) 『太平御覽』卷五一、地部一六・石に『益部耆舊傳』からとして引用がある。他、同内容が、『後漢書』卷八二、方術列傳・任文公傳、『華陽國志』卷三、『太平御覽』卷四三二、人事部七三・智所引『華陽國志』にみえる。

石 08 ①

春秋潭潛巴曰山石浦出臣下盈又曰日食之敗山石行也

石 08 ②

『春秋潭潛巴』曰、「山石浦出、臣下盈。」又曰、「日食之敗、山石行也。」

石 08 ③

『春秋潭潛巴』に曰く、「^(一) 山石浦より出づれば、臣下盈つ。」と。又曰く、「^(二) 日食の敗、山石行くなり。」と。

石 08 ④

(一) 『天地瑞祥志』のみにみえる引用(『緯書集成』による)。
(二) 『天地瑞祥志』のみにみえる引用(『緯書集成』による)。

石 09 ①

孝昭元鳳三年正月泰山萊無山南勾々有數千人聲民視之有大石自高大五尺丈卅八圍入地深八尺三石為足立後有白焉數千集其旁眭孟以為石陰類下民龜泰山岱宗之獄王者易姓失伐之雲當有庶人為天子者孟生伏誅京房易伝曰復崩来元各〈師古曰復非之乱也今易崩字作明也之〉自上下者為崩厥應泰山之石顛而下〈顛墜也〉聖人受人君虜又曰石立如人為鹿雄有特政立於山周姓五於平地異姓立於水聖人立於澤小人

石 09 ②

孝昭元鳳三年正月、泰山萊無山南、勾々有數千人聲、民視之、有大石自〔立〕、高丈五尺、大卅八圍、入地深八尺、三石為足。立後、有白鳥數千集其旁。眭孟以為石陰類、下民象。泰山岱宗之獄、王者易姓、告代之處、當有庶人為天子者。孟坐伏誅。京房『易伝』曰、「復、崩來無咎。〈師古曰、『復卦之辭也。今『易』崩作朋。』之也。〉自上下者為崩、厥應泰山之石顛而下。〈顛、墜也。〉聖人受〔命〕、人君虜。」又曰、「石立如人、〔庶〕為雄。有持政。立於山、同姓。立於平地、異姓。立於水、聖人。立於澤、小人。」

石 09 ③

^(一)孝昭元鳳三年正月、泰山萊蕪山の南、匈匈として數千人の聲有り、民之を視れば、大石の自ら立つ有り、高さ丈五尺、大いさ冊八圍、地に入ること深さ八尺、三石足と爲す。立ちて後、白鳥の數千其の旁に集まる有り。眭孟以爲らく石は陰類、下民の象、泰山は岱宗の嶽、王者姓を易へ、告げて代はるの處なり、當に庶人の天子と爲る者有るべし、と。孟坐して誅に伏す。京房『易傳』に曰く、「復、崩れ來りて咎無し。〈師古曰く、『復の卦の辭なり。今『易』崩を朋に作る。』と。之なり。〉上自り下る者を崩と爲し、厥の應泰山の石顛じて下る。〈顛は、墜なり。〉聖人命を受け、人君虜となる。」と。又曰く、「石の立つこと人の如し、庶雄と爲る。政を持つ有り。山に立つは、同姓。平地に立つは、異姓。水に立つは、聖人。澤に立つは、小人なり。」と。

石 09 ④

(一)『漢書』卷二七中之上、五行志にみえる。同内容は、『漢書』卷七五、眭弘傳にもあり。

石 10 ①

山石化爲天人天下受始化爲野禽獸兵以天下有虚者化爲蟄虫天下兵起化爲天畜天下憂化爲耳目邑有殃石無故自長其邑兵強無故自小其邑兵強石無故相累此謂民厄石生重累不出五年五月謀臣逆成石無故皆泣天下流亡石自動有兵赴石起石有血色大戰石忽如血諸侯不助父子絶山主火石邑出天子石生於平野庶人逆謀興兵交不出三年石生水中上見者近石謀逆与女主相連不出八年兵行石從水中生者清角受命而起推道行德復受命也

石 10 ②

山石化爲天人、天下受始。化爲野禽獸、兵以天下有虚者。化爲蟄蟲、天下兵起。化爲天畜、天下憂。化爲耳目、邑有殃。石無故自長、其邑兵強。石無故自小、其邑兵強。石無故相累、此謂民厄。石生重累、不出五年五月、謀臣逆成。石無故皆泣、天下流亡。石自動、有兵赴。石起石有血色、大戰。石忽如血、諸侯不助。父子絶。山主火石、邑出天子。石生於平野、庶人逆謀興兵交。不出三年。石生水中、上見者近石、謀逆與女主相連、不出八年、兵行。石從水中生者、清角受命而起。推道行德、復受命也。

石 10 ③

^(一)山 石化して天人と爲れば、天下始を受く。化して野禽獸と爲れば、兵以て天下に虚有り。化して蟄蟲と爲れば、天下兵起こる。化して天畜と爲れば、天下憂ふ。化して耳目と爲れば、邑に殃有り。石故無くして自ら長ずれば、其の邑兵強し。石故無くして自ら小さければ、其の邑兵強し。石故無くして相累ぬれば、此れ民の厄と謂ふ。石を生じて重累、五年五月を出でずして、謀臣逆成す。石故無く皆泣けば、天下流亡す。石自ら動けば、兵の赴く有り。石起きて石に血色有れば、大いに戦ふ。石忽ち血の如くなれば、諸侯助けず。父子絶ゆ。山火石を主どり、邑天子を出だす。^(二)石 平野に生ずれば、庶人逆謀して兵を興し交はる。三年を出でず。石水中に生じて、上より見て石に近ければ、謀逆し女主と相連なり、八年を出でずして、兵行はる。石水中従り生ずれば、清角 命を受け起こる。道を推し 徳を行ひて、

復た命を受くるなり。

石 10 ④

(一)『唐開元占經』卷九九、山石變化所引『地鏡』に類似文がみえる。

(二)『唐開元占經』卷四、地生石所引『地鏡』に類似文がみえる。

石 11 ①

稽命徵曰王者君臣父子夫婦尊卑有別則石生於澤

石 11 ②

『稽命徵』曰、「王者・君臣・父子・夫婦、尊卑[□]有別、則石生於澤。」

石 10 ③

『稽命徵』に曰く、「^(一)王者、君臣・父子・夫婦、尊卑に別有らしむれば、則ち石澤に生ず。」と。

石 11 ④

(一)『太平御覽』卷八七三、休徵部二・石に『禮稽命徵』からとして引用あり。

石 12 ①

石生都邑人君去故就新且易政不出三年二月國凶敗石從此為非兮一名謂厭不出三年九月有兵從西地起石生宗廟名曰光祖此人君不用先王法度不出二年九月諱易石生如人狀天子其易諱石生正方三公有外謀不出二年必有逆者也石生而往聚不生五年八月必有兵流行沙從名曰陰及不出五年軍中地忽生石宰重可久居益士卒

石 12 ②

石生都邑、人君去故就新、且易政。不出三年二月、國凶敗。石從此為非兮。一名謂厭。不出三年九月、有兵從西地起。石生宗廟[□]、名曰光祖、此人君不用先王法度、不出二年九月、諱易。石生如人狀、天子其易諱。石生正方、三公有外謀、不出二年、必有逆者也。石生而往聚、不出五年八月必有兵流行。河涉^{□□□}是曰陰。及不出五年、軍中地、忽生石宰、重可久居。益士卒。

石 12 ③

^(一)石 都邑に生ずれば、人君故きを去りて新しきに就き、且つ政を易ふ。三年二月を出でずして、國凶敗す。石 此れ従り非と爲る。一名厭と謂ふ。三年九月を出でずして、兵の西地従り起こる有り。石 宗廟に生ずるを、名づけて光祖と曰ふ。此れ人君先王の法度を用ゐざれば、二年九月を出でずして、諱易はる。石 生じて人狀の如ければ、天子其れ諱を易ふ。石 正方に生ずれば、三公に外謀有り、二年を出でずして、必ず逆らふ者有るなり。石 生じて往聚すれば、五年八月を出でずして必ず兵の流行有り。河涉は是れ陰と曰ふ。五年を出でざるに及び、軍中の地、忽ち石宰を生じ、重ぬれば久しく居るべし。士卒を益す。

石 12 ④

(一)『唐開元占經』卷九九、石生廟邑に『地鏡』からとして類似した文の引用あり。また、『唐開元占經』卷九九、山石變化にも一部類似した文あり。石 10 に既出。

石 13 ①

晋書曰愍帝建興五年石言于平陽是時帝蒙^[1]塵分〈者賤煞〉炁在平陽故有非言之物而言妖之大者俄而帝為逆胡所殺又曰洛陽宮西宜秋黑門東向南壁石生地中始高三丈如香爐形後如人偃槃薄不可掘路人多事礼^[2]之後梁果有石勒出也

[1] 底本は蒙の草體で書かれる。

[2] 尊經閣本は「祀」に作る。

石 13 ②

『晋書』曰、「愍帝建興五年、石言于平陽。是時帝蒙[□]塵分。〈者賤煞〉亦在平陽、故有非言之物而言。妖之大者。俄而帝爲逆胡所殺。」又曰、「洛陽宮西宜秋里門東、向南壁石生地中。始高三丈、如香爐形。後如人偃、槃薄不可掘。」路人多事祀[○]之。後趙果有石勒出也。

石 13 ③

『晋書』に曰く、^(一)「愍帝建興五年、石平陽に言ふ。是の時帝塵分を蒙る。〈者賤煞〉亦た平陽に在り、故に非言の物有りて言ふ。妖の大なる者なり。俄にして帝逆胡の殺す所と爲る。」と。又曰く、^(二)「洛陽宮の西宜秋里門の東、南に向くところの壁、石地中より生ず。始め高さ三丈、香爐の形の如し。後に人の偃の如くして、槃薄くて掘るべからず。」と。路人多く事へて之を祀る。後趙果して石勒の出づる有るなり。

石 13 ④

(一)『晋書』卷二七、五行志にみえる。

(二)王隱『晋書』(隋・杜公瞻『編珠』卷一所引)にあり。『晋書』卷二八、五行志にもみえる。武帝太康十年(二八九)のこととする。

二三、 船

【概要】

船の沈没と火災の記事を収める。

船 01 ①

船〈舌縁反平〉

船 01 ②

船〈舌縁反。平。〉

船 01 ③

船^(一)〈舌縁の反。平。〉

船 01 ④

(一)『玉篇』卷一八「舩」字「市專切」。『廣韻』卷二「舩」字「食川切」。「舌縁切」の反切注例はなし。

船 02 ①

張璠漢紀曰梁冀地中舩無故自覆後沫魏

船 02 ②

張璠『漢紀』曰、「梁冀[□]池中、舩無故自覆。後誅[□]。」

船 02 ③

張璠『漢紀』に曰く、「^(一)梁冀[□]池中にて、舩故無く自ら覆る。後誅さる。」と。

船 02 ④

(一)『藝文類聚』卷七一、舟車部・舟にみえる。『太平御覽』卷七六九、舟部一・叙舟も張璠『漢記』からとしてほぼ同文を引用する。『太平御覽』卷八八五、妖異部一・怪は、張璠『漢紀』から引用し、かつ兩者にない「後被誅」の三字あり。

船 03 ①

晉書曰安帝隆安二年三月龍舟二乗災是水沴火也其後桓玄篡位帝乃播越天戒若曰王者流遷不後仰龍舟故災之耳

船 03 ②

『晉書』曰、「安帝隆安二年三月、龍舟二乗災。是水沴火也。其後桓玄篡位、帝乃播越。天戒若曰、『王者流遷、不復^{□□}御龍舟、故災之耳。』」

船 03 ③

『晉書』に曰く、「^(一)安帝隆安二年三月、龍舟二乗災す。是れ水 火を^{やぶ}沴るなり。其の後桓玄位を篡ひ、帝乃ち播越す。天戒めて、『王者流遷し、復た龍舟を御せず、故に之に災あるのみ。』」と曰ふが若し。

船 03 ④

(一)『晉書』卷二七、五行志にみえる。

(佐野誠子)

二四、 金車

【概要】

「舜の時に現れた」という車の瑞「金車」について、『瑞應圖』をよりどころに記す。圖像を伴う（【圖 2】）。なお反切は「金車」のうち「車」のみ。

金車 01 ①

金車〈齒耶反平〉

金車 01 ②

金車〈齒耶反。平。〉

金車 03 ③

金車^(一)〈齒耶の反。平。〉

金車 01 ④

(一) 國立國會圖書館藏『玉篇』第一八「車部」第二八二にみる、「車」の反切「齒耶反」に一致する。



圖 2 金車

金車 02 ①

瑞應圖曰金車王者至孝仁德廣施則出舜時出於帝庭也

金車 02 ②

『瑞應圖』曰、「金車王者至孝、仁德廣施、則出。舜時、出於帝庭也。」

金車 02 ③

『瑞應圖』に曰く、「^(一)金車は 王者 至孝にして、仁德 廣く施さるれば、則ち出づ。舜の時、帝庭に出づるなり。」と。

金車 02 ④

(一) 「金車王者至孝」までは、『宋書』卷二九、符瑞志に同文「金車、王者、至孝、則出。闕。」がある。續く「仁德廣施、則出、舜時出於帝庭也。」については、『唐開元占經』卷一一四、金車に『瑞應圖』の記述として「王孝、至孝仁德廣施、則金車出。舜時見於帝廷。」（清・馬國翰『玉函山房輯佚書』所收梁・孫柔之『瑞應圖』〔以下『孫氏瑞應圖』〕「金車」にも『唐開元占經』の引用文として同文あり）、『稽瑞』（早稲田大學圖書館所藏清刊本）第六葉表裏「玉馬光澤、金車耀途」に『孫氏瑞應圖』の記述として「王者、至行仁德廣施、則金車出。又曰、帝舜則德盛、金車出於庭也。」とあるのにほぼ一致する。ただし、『太平御覽』卷七七三、車二・叙車では『瑞應圖』ではなく『孝經援神契』の引用文として「德至山陵、則山出木根車。金車、王者行仁德、則出。虞舜德盛於山陵、故山車出。山車、自然之物也。山藏之精、與象車相似。舜德盛、山車有垂綬。」とあり、「虞舜の車の瑞」として現れるのは「山車」とする（『事類賦注』卷一六等にもほぼ同文

あり)。『路史』卷二一に引く『瑞應圖』には「舜時有三足烏金車見于庭、即山車。」とあり、舜の御代に現れた「金車」を「山車」と同一視する。

二五、根車

【概要】

王徳が山に至ると現れる、という車の祥瑞「根車」について、緯書（孝經緯）をよりどころに記す。圖像を伴う（【圖3】）。反切は「根車」のうち「根」のみ。

根車 01 ①

根車〈古痕反平〉

根車 01 ②

根車〈古痕反。平。〉

根車 01 ③

根車^(一)〈古痕の反。平。〉

根車 01 ④

（一）『孫氏唐韻考』卷二四「痕」の「根」には「古痕切」とある。

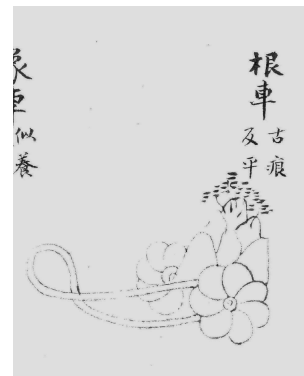


圖3 根車

根車 02 ①

孝經援神契曰徳至山陵則山出根車也根車應戴養萬物也

根車 02 ②

『孝經援神契』曰、「徳至山陵、則山出根車也。根車、應載[□]養萬物也。」

根車 02 ③

『孝經援神契』に曰く、「^(一)徳 山陵に至れば、則ち山は根車を出すなり。根車は、萬物を載養するに應ずればなり。」と。

根車 02 ④

（一）『藝文類聚』卷七一、車に「『孝經援神契』曰、「徳至山陵、則山出根車。〈根車、應載養萬物也。〉」とあり、「戴」を「載」につくる以外は、本條に一致。他方、ほぼ同様の内容だが「根車」を「木根車」につくる『孝經援神契』が、『太平御覽』卷七七三、車二・叙車（金車 02 ④参照）ほか、『玉海』卷七八、『事類賦』卷一六、『古微書』卷二八など、宋代以降の類書にみえる。ただし「根車」は後漢・黃香「九宮賦」「乘根車、駕神馬」等、後漢時代より馬と一對の「車馬」の祥瑞として國家讃文にみえるのに對し、「木根車」の用例は漢代にはない。『稽瑞』第一四葉表「金勝名巧、根車表徳」が引く『孝經援神契』の同文には宋均注として「山木根車象也。」とある點を手がかりとすれば、「木根車」は魏の宋均注から生まれた可能性が考えられる。

この根車ほか、象車・山車（後述）など、車の祥瑞は、「山」との関わりが深い。その嚆矢は、『禮記』禮運にみる祥瑞記述「故天不愛其道、地不愛其寶、人不愛其情。故天降膏露、地出醴泉、山出器車、河出馬圖。」に遡り、「河の出す馬圖」と一對の「山の出す器車」とされる。この「山の出す器車の瑞」は後漢初成立の班固『白虎通』卷六「封禪」に至ると、皇帝の封禪儀禮に關する祥瑞記述「天下太平、符瑞所以來至者、以爲王者承天統理、調和陰陽、陰陽和、萬物序。休氣充塞、故符瑞並臻、皆應德而至。德至天、則……、德至山陵、則……、陵出……、山出器車、澤出神馬。」にみえ、「澤の出す馬」と一對の車馬の祥瑞となる。なお當該祥瑞記述の典據として清・陳立『白虎通疏證』では本條「根車」を含む孝經緯を多く引くが、渡邊義浩氏は『白虎通』でこの様に孝經緯が中心的な典據とされる背景に、「孝」を通じた「天と天子の父子關係」を指摘する（渡邊義浩「後漢儒教の固有性－『白虎通』を中心として」同氏『兩漢の儒教と政治權力』汲古書院、2005年参照）。

「根車圖」【圖3】は、山を載せる點で、象車・山車と同じ。

二六、 象車

【概要】

「山の精」であるという車の祥瑞「象車」について、『孫氏瑞應圖』をよりどころにする。各種圖書類にはみえず、本條のみにみえる貴重な佚文を含む。圖像を伴う（【圖4】）。反切は「象車」のうち「象」のみ。

象車 01 ①

象車〈似養反上〉

象車 01 ②

象車〈似養反。上。〉

象車 01 ③

象車^(一)〈似養の反。上。〉

象車 01 ④

(一)『大廣益會玉篇』卷二三「象部」第三七八に「象、似養切」。『玉篇』の抄出本である空海『篆隸萬象名義』にも「象」の反切に「似養反」。

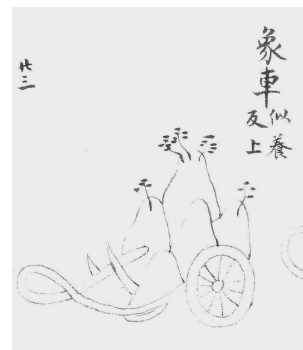


圖4 象車

象車 02 ①

孫氏瑞應圖曰象車者山之精也王者德義則出之

象車 02 ②

『孫氏瑞應圖』曰、「象車者、山之精也。王者德義、則出之。

象車 02 ③

『孫氏瑞應圖』に曰く、「^(一)象車は、山の精なり。王者 徳義なれば、則ち之を出だす。」と。

象車 02 ④

(一)『宋書』卷二九、符瑞志には「象車者、山之精也。王者徳澤、流洽四境、則出。^闕。」とあるが、後半部「徳義、則出之」とする象車は、本條の他に例をみない。『孫氏瑞應圖』の書名をもつ「象車」の文例も、本條のみ（その理由については烏車 02 ④参照）。

「象車」の語は、夙に先秦～漢代の文獻に現れる。例えば『韓非子』十過篇において黄帝が泰山に諸々の鬼神を集める場面に、六頭の蛟龍の牽く黄帝の乗り物として描かれ（昔者、黄帝合鬼神於泰山之上、駕象車而六蛟龍、畢方並鎋、蚩尤居前、風伯進掃、雨師洒道、虎狼在前、鬼神在後、騰蛇伏地、鳳皇覆上、大合鬼神、作爲清角。）、漢代の皇帝儀禮の一「巡狩^{じゅんしゆ}」を描いた後漢・崔駰「東巡頌」でも皇帝の駕す「太一の象車」と記されるが（於是、乘輿。登天靈之威路、駕太一之象車、升九龍之華旗、建掃霓之旌旄。〔『漢魏六朝百三家集』卷一二、漢『崔駰集』〕）、しかしこれら漢迄の文獻にみる「象車」はいずれも祥瑞ではない。これに對し「祥瑞としての象車」の用例は、曹魏以降に初見である。例えば、魏文帝「讓禪第三令」「河未出良馬、山未出象車。」、晉・張華『博物志』「和氣相感則生朱草、山出象車、澤出神馬、陵出黑丹。」など「馬」と一對となり、前掲の「器車」「根車」や次に示す「山車」と同じ、「山」の出す祥瑞となる。ただし、六朝末に多く成立した各種祥瑞圖志（以下「圖書」）には「象車」の項目はなく、その内容は「烏車」として採られる（その理由については烏車 02 ④参照）。

「象車圖」【圖 4】は根車、山車同様、山を載せるが、象の牙が描かれる點が異なる。

二七、 山車

【概要】

「山が出し」「自然に形成される」という車の祥瑞「山車」について、經書（『禮記』禮運）、緯書（禮緯・春秋緯）、『瑞應圖』をよりどころに記す。圖像を伴う（【圖 5】）。なお本書引用の各種車の祥瑞のうち、山車のみ反切なし。「祥瑞としての象車」同様、「祥瑞としての山車」の初見は魏晉である。唐にむけて、重要な皇帝シンボルとなる「車の祥瑞（とくに山車：後述）」誕生の第一歩は、魏晉という時代にあるといえる。

山車 01 ①

礼記礼運曰山出器車礼升威儀曰政升平則山車乗
句者自然之車也句者典也不揉治而自員曲故言乗句

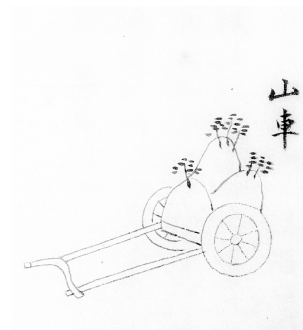


圖 5 山車

山車 01 ②

『禮記』禮運曰、「山出器車。」『禮斗威儀』曰、「政升平、則山車垂句。山車者、自然之車也。句者、曲也。不揉治而自圓曲、故言垂句。」

山車 01 ③

『禮記』禮運に曰く、「^(一)山は器車を出だす。」と。『禮斗威儀』に曰く、「政升平なれば、則ち山車垂句す。山車は、自然の車なり。句は、曲なり。揉治せずして自ら圓曲す、故に垂句と言ふ。」と。

山車 01 ④

(一) 現行の『禮記』禮運「山出器車」(根車 04 ②参照)に對する唐の孔穎達疏(十三經注疏・中華書局本)には、「天下太平時に、人爲的に曲げずとも、自ら曲がり形成される」、という「自然之車」＝「山車」について『禮緯斗威儀』を引き、「其政太平。山車垂鉤。注云、山車、自然之車。垂鉤、不揉治而自圓曲。」とある(『玉海』卷七八「周器車」等に同文あり。)^(一)「升平」を「太平」、「垂句」を「垂鉤」につくり、「句者、曲也」の説明文が抜ける以外は、本條の内容に近い。

「祥瑞としての山車」の初見は魏晉以降の史書の輿服志(車の興りの説明文中)であり、秦漢以來の豪奢な皇帝の車「金根車」の前身として「殷代に現れた山車の瑞」が頻出する。その補説として、六朝史書に引用される『禮緯』には「山車、垂句」とあり、本條に通じる「山車」の記述がみえている。(『宋書』卷一八、禮志「『禮緯』曰、「山車垂句」、句、曲也。言不揉治而自曲也。」、『南齊書』卷一七、輿服志「昔三皇乘祗車、出谷口、夏氏以奚仲爲車正。殷有瑞車、山車垂句、是也。」等)。

このように六朝の史書に夙に『禮緯』「山車垂句」がみえる點に加え、『藝文類聚』卷七一、車に引く本條と最も近似する『禮斗威儀』の記述には「山車垂句。山車者、自然之車也。句者、曲也。不揉治而自圓曲、故言垂句。」とある點から、『天地瑞祥志』「山車」の「垂句」は「垂句」に、「句者、曲也」は「句者、曲也」に改めた。

冒頭の「政升平則」については以上の佚文にはないが、唯一『稽瑞』第一三葉裏「山車誰造、嵩柱誰營」の引く『禮斗威儀』の記述「人君乘木而王其政升平、則山車垂句。句者、曲也。不揉而自圓曲、故曰垂句。」に認められる。さらにこの『稽瑞』の「山車」にみる引書は、以下にも確認するように本條に総て一致する點から(『孫氏瑞應圖』『禮斗威儀』『(春秋)運斗樞』『禮記』)、『天地瑞祥志』の山車をめぐる記述は『稽瑞』のそれと粉本を共有する可能性が高い。

山車 02 ①

□升樞曰搖光得則山出神車陵出黑芝

山車 02 ②

『春秋運斗樞』曰、「搖光得、則山出神車、陵出黑芝。」

山車 02 ③

『春秋運斗樞』に曰く、^(一)「瑤光得れば、則ち山は神車を出し、陵は黒芝を出だす。」と。

山車 02 ④

(一)『稽瑞』「山車誰造、蒿柱誰營」に引く『春秋運斗樞』に「瑤光得、則山出山車。」とあるのに一致するが、「神車」につくる例は本條のみ。「陵出黒芝」については、『藝文類聚』卷九八、祥瑞・木芝に『春秋運斗樞』の記述として「瑤光得、陵出黒芝」とある。

山車 03 ①

孫氏瑞應圖山車者山藏之精王者不藏金玉山澤以時通山海之饒以給天下則出也

山車 03 ②

『孫氏瑞應圖』曰、「山車者、山藏之精。王者不藏金玉、山澤以時通山海之饒、以給天下、則出也。」

山車 03 ③

『孫氏瑞應圖』に曰く、^(一)「山車は、山藏の精なり。王者 金玉を藏さず、山澤 時を以て山海の饒に通じ、以て天下に給へば、則ち出づるなり。」と。

山車 03 ④

(一)「山藏之精」までは『稽瑞』「山車誰造、蒿柱誰營」に引く『孫氏瑞應圖』「山車、自然之車也。蓋山藏之精。」に近いが、『太平御覽』卷七七三、車二・叙車では同文が『孝經援神契』の記述として採られる(金車 02 ④参照。宋『玉海』卷七八、宋『事類賦』卷一六等にも『孝經援神契』の同文を引く)。續く本條「不藏金玉」以下については、『宋書』卷二九、符瑞志に引く「山車」には『孫氏瑞應圖』の書名及び「王者」の二字は欠けるものの、ほぼ同文「山車者、山藏之精也。不藏金玉、山澤以時、通山海之饒、以給天下、則山成其車。闕。」がみえる。(『釋史』卷一五九、祥應、『七緯』卷一九等にも同文あり。)なお「山の精」とする車の祥瑞は、前述「象車」および後述「烏車」も同じ。

以下、「祥瑞としての山車」をめぐり、私見を述べる。まず注目したいのが後漢末・鄭玄の三禮注にみる車(器車、柏車など)には、「祥瑞としての山車」は引用されないことである。「山車」の語の初見は、魏晉以降の史書にみる「殷の瑞としての山車」(山車 01 ④參録照)である。となれば、「山車」は先行する「山の出す車=器車・根車・象車」を包括するものとして、魏晉以降に誕生した祥瑞である可能性も否定できない(緯書の一部は魏晉以降の成立である點をめぐっては、夙に安居香山『緯書の成立とその展開』國書刊行會 1979 年、100 頁等に指摘がある。六朝の史書に初見の『禮緯』「山車垂句」をその一つとすることも可能である。)

もう一點留意すべきは、唐にかけての山車の受容と六朝文人との関わりである。「山車」は、『宋書』符瑞志では掲載優先順位は低い(金車・象車・根車・山車の順序)、『大唐六典』「尚書禮部」では「大瑞」の車の瑞のトップに掲げられ(山車・象車・烏車・根車・金車の順序)、初唐の封禪関連文でも多く詠まれる重要な祥瑞となる。その要因は、六朝美文の先達(王融・沈約)が國家文書に示した王權稱讃の祥瑞「山の出す車馬

の瑞」を継ぎつつ、六朝末の美文家（徐陵・庾信）による著名な國家讃文（九錫文等）において、強大な皇權を象徴するものとして「山車澤馬」が詠まれた點、初唐の國家讃文における六朝美文（とくに徐庾の美文）からの強い影響等、が考えられる（拙稿「祥瑞としての山車－亂世を統べるかたち」『中國詩文論叢』第 35 集、2016 年参照）。

また本條に附された圖像【圖 5】は、現存する名稱の彰かな「祥瑞としての山車圖」として貴重。（よって該圖に據り、中國浙江省海寧三國畫像石墓の祥瑞圖にみる「山出玉壁」と稱される圖像が「山車」である可能性を指摘した。拙稿「「山産玉壁」再考－海寧三國畫像石墓中的山車圖像研究」『中國美術研究』第 20 輯、2016 年参照）。

二八、 烏車

【概要】

「山の精」であるという車の祥瑞「烏車」について、『孫氏瑞應圖』をよりどころに記す。『宋書』符瑞志では「象車」として採られる説明内容が「烏車」として記される。六朝末成立の各種圖書にも「象車」の項目がない代わりに、先行する『宋書』符瑞志の「象車」の記述が「烏車」として採られる點等から、「烏車」は「象車」の誤写から産まれた可能性が考えられる。本書所載の車の祥瑞のうち、この「烏車」のみ圖像を設けるべきスペースがないのもその證左の一つとなる。

烏車 01 ①

烏車〈屋孤反平〉

烏車 01 ②

烏車〈屋孤反。平。〉

烏車 01 ③

烏車^(一)〈屋孤の反。平。〉

烏車 01 ④

(一)『重修玉篇』卷二四「烏部」第三八六「烏、於于切」、『篆隸萬象名義』では「烏」は「於胡反」。ただし「屋孤反」の反切注は、「烏」と同音の「汚」字につけられた例あり（『康熙字典』所引『唐韻』など）。

烏車 02 ①

孫氏瑞應圖曰烏車者山之精也德流四澤境則出之

烏車 02 ②

『孫氏瑞應圖』曰、「烏車者、山之精也。德澤、流治四境、則出之。」

烏車 02 ③

『孫氏瑞應圖』に曰く、^(一)「烏車は、山の精なり。^(二)德澤にして、四境に流れ^{うるほ} 洽せば、則ち之を出出す。」と。

烏車 02 ④

(一)清・王仁俊『玉函山房輯佚書續編』(以下『玉函續編』)所収『孫氏瑞應圖』には「烏車、山之精。瑞車也。」を『稽瑞』「白澤應德、烏車効祥」引『孫氏瑞應圖』の文として採るが、現行の『稽瑞』(早稲田大學圖書館所藏清刊本)第一七葉表「白澤應德、烏車効祥」では同文は『熊氏瑞應圖』の文として採録される。

(二)「德澤」以降については、『稽瑞』「白澤應德、烏車効祥」に、(一)とは別に引く『孫氏瑞應圖』「王者、德澤流洽於四境、則烏車出。」に一致。(『玉函續編』及び東京大學東洋文化研究所藏清刊本『觀古堂所著書』〔以下『觀古堂』〕第一集所収『孫氏瑞應圖』「烏車」にも『稽瑞』からの引用として同文あり)。しかし『宋書』卷二九、符瑞志には「烏車」の項目はなく、「象車者、山之精也。王者德澤、流洽四境、則出。闕」とあり、六朝末成立の各種圖書にみる「烏車」の説明が「象車」のものとして記される。この点については清人葉德輝も疑問視しており、『觀古堂』所収『孫氏瑞應圖記』の序文に「烏車、沈志、作象車」と特記している。

先述のように(象車 02 ④)六朝末の各種圖書には「象車」の項目はないが、代わりに『宋書』符瑞志「象車」の文と一致する「烏車」が現れ始める。これに加えさらに本書「象車」をめぐる「德義、則出之」という文が本書本條のみである点(象車 02 ④参照)、本書所収の車の祥瑞のうち「烏車」のみ圖像が欠損する点等から、六朝中期の『宋書』から六朝末の各種圖書成立までの間に、「烏車」は「象車」の誤寫から生まれた可能性が推測できる。『天地瑞祥志』所載のいくつかの祥瑞については、本来圖像を描くべき空白スペースが残される。しかし、烏車にはそのスペースすらない。他方、本書所載の「車の祥瑞」は、「烏車」以外すべて圖像を伴う。これらはつまり、本書成立の當初から、先行の諸本にも烏車のみ圖像は存在しなかった可能性——本来それは「象車」であったため——を示唆するだろう。「烏車」が「象車」の誤寫から産まれた可能性については、もう一点、烏車の成立時代として推測される南北朝期の「象」「烏」兩字の類似によっても證明される。例えば、北朝碑文(東魏「元顯墓誌」「象」、北魏「元延命墓誌」「烏」)など。



圖 6 「象」の楷書：河南安陽出土：元顯墓誌（東魏武定元年〔544〕）



圖 7 「烏」の楷書：河南洛陽出土：元延命墓誌（北魏太昌元年〔532〕）

出典：京大人文研東アジア情報學研究センター拓本文字データベース検索

(全體像是北京國家圖書館藏『中國歷代石刻拓本匯編』1989年刊、中州古籍出版社「象」は第六冊「北朝」112

二九、 威香

【概要】

王に禮が備われれば出るという祥瑞「威香」について『瑞應圖』をよりどころに記す。圖像を伴う(【圖 8】)。反切については「威」「香」雙方。

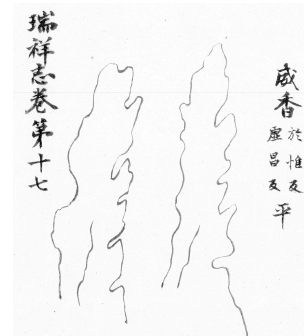


圖 8 威香

威香 01 ①

威香〈於惟反平虚昌反〉平

威香 01 ②

威〈於惟反。平。〉 香〈虚良反。〉平。

威香 01 ③

威^(一)〈於惟の反。平。〉、香〈虚良の反。〉平。

威香 01 ④

(一)「威」の反切については、『篆隸萬象名義』「於婦反」、『大廣益會玉篇』卷三「於韋切」。
「香」の反切については、『篆隸萬象名義』「虚良反」、『大廣益會玉篇』卷一五「許良切」、
よって本條の反切「虚昌」は「虚良」に改めた。また「威香」ともに『篆隸萬象名義』
の反切に近い。

威香 02 ①

瑞應圖曰王者礼至備則常生也

威香 02 ②

『瑞應圖』曰、「王者、禮至備、則常[○]生也。」

威香 02 ③

『瑞應圖』に曰く、「王者、禮備はるに至れば、則ち常^(一)に生ずるなり。」と。

威香 02 ④

(一)『稽瑞』第一一葉裏「胡爲福草、胡爲威香」引く『孫氏瑞應圖』には「威香、瑞草也。
王者、禮備、則生于殿前。又曰王者愛人則生。」とある。また、『太平御覽』卷八七三、
威蕤に引く『孫氏瑞應圖』「王者禮備、則威蕤生、又曰、王者愛人倫、則威蕤生於殿前。」
にほぼ一致する。

(松浦史子)

〔附記〕本稿は、科学研究費助成事業基盤研究(B)(一般)「前近代東アジアにおける術数文化の形成と伝播・展開
に関する学際的研究」(課題番号 16H03466 研究代表者水口幹記)の助成を受けた研究成果の一部である。